

テーマ①：「自分らしく生きる」

1. 「初めまして！新しい担当の國貞です」
2. 「やりたい仕事」
3. 「やりたい仕事を探す」
4. 「現場で汗を流すことの大切さ」
5. 「人の心がつかめる人」
6. 「みじめな思い」
7. 「やる気と辛抱」
8. 「自分で考える」
9. 「想いを描く」
10. 「価値観」
11. 「落ち込む時」
12. 「カッコいい生き方」
13. 「若い時の苦労は・・・」
14. 「感謝できる人」
15. 「誠実に一生懸命に」
16. 「勉強する」
17. 「奇跡」
18. 「自分へ矢印を向ける」
19. 「関係性」
20. 「自律」
21. 「ビジネスDNA」
22. 「心の支え」
23. 「夢のある人生」
24. 「自分らしく生きるために成果を出す」
25. 「人の期待に応える生き方」
26. 「働こうとしない若者」
27. 「自分の仕事を見つける」
28. 「幸せはどこにある」
29. 「お金を稼ぐということ」
30. 「素敵な人」
31. 「外国人との仕事」
32. 「挑戦し続ける」

第1回

「初めまして！新しい担当の國貞です」

こんにちは！パフの社会人向けメルマガを担当させて頂くことになった國貞です。これから毎週一回、「会社」・「仕事」・「人間」をテーマに、「仕事って何のためにやってるんだっけ？」、「働く上で大切なことって何？」なんてなことを、皆さんと一緒に考えてゆきたいと思います。

第一回は、メルマガ執筆担当として僕の略歴を紹介しておきます。僕はもともと技術屋。大学時代は機械工学を勉強し、会社に入ってから5年程、海外に製鉄所を建てにゆくという仕事をしていました。1987年頃、当時のビルマ、今のミャンマーに現場監督として半年程赴任したこともあります。

技術部門を5年間経験した後、同じ会社の人事部に移り4年ほど採用担当。それから経営企画、MBA 留学、帰国後は海外企業との M&A（買収・合併）の交渉などを担当し、今から4年前に17年間勤めた会社を辞めました。

「自分の足で立って生きてゆきたい」そんな気持ちで独立し、今は中小企業の社長さん達の右腕として経営課題を解決することや、大企業の管理職研修などをメインの仕事にしています。

43歳既婚、中1の息子と小5の娘がいます。スキー・テニス・ゴルフ・ウィンドサーフィン、何でもやりましたが、運動神経がかなり鈍くどれも芽がでませんでした。

縁あって釘崎さんとめぐりあい、釘崎さんにほれ込み（変な関係ではない）、今回メルマガを担当させて頂くことになりました。

では、来週第一話をお届けします。

以上

（文字数：601文字）

第2回

「やりたい仕事」

自分が本当にやりたい仕事は何だか分かりますか？就職前に自己分析をし、たくさんの人の話を聞いて今の会社を選んだのだと思います。希望通りの会社に入れた人もそうでなかった人もいるでしょう。希望通りの会社に入れた人は想像していたような仕事を与えられましたか？希望通りの会社に入れなかった人は何か面白そうな仕事が見つかりそうですか？

「有名大学を出て、有名企業に入って幸せになる。」そんなことでは幸せになれないことは既にだれもが知っています。親達の世代が信じていた常識が常識ではなくなっていました。そんな時代だからこそ、皆さんにとって、「やりたいこと」がとても大切になっているのだと思います。

では、どうやったら「やりたいこと」が見つかるのか？僕は「やりたいこと」はそう簡単に見つからないんじゃないかと思っています。僕自身、今までに様々な仕事をし、既に40歳を超えているというのに、「本当にあなたのやりたい事って何ですか？」と聞かれると答えに窮してしまいます。

既に、自分のやりたいことを見つけている人は本当に幸せです。でも、多くの方は自分のやりたいことが分からず、人生を右往左往する中で、やりたいことを見つけてゆくのだと思います。

仕事は実際にやってみなければわかりません。だから仕事経験の少ない皆さんが、「自分に向いている仕事」とか「自分のやりたい仕事」とかが分からなくてあたりまえなのです。

仕事との出会いは偶然の場合のほうが多いのです。出会った仕事を一生懸命やり、自分が成長し、何かを達成し、周りの人から認められ、そして更に大きな責任を任されてゆく。そんなプロセスの中で、自分のやりたいことが見つかったり、自分がやっている仕事が面白くなったりするのだと思うのです。

まずは目の前の仕事を、「この仕事以外に自分に向いてる仕事はない」と思って、精一杯やってみてください。嫌でしかたがなくても3ヶ月辛抱してみてください。きっと、目の前の仕事が違ったふうに見えてくると思います。

以上

(文字数：832文字)

第3回

「やりたい仕事を探す」

今回はまだ仕事を始めていない人に対して、やりたい仕事をどうやって探せばよいのかについて書いてみたいと思います。

今年、イチローが偉業をなしとげました。夢を実現する人。やりたいことを見つけている人は本当に素晴らしいと思います。皆さんは子供頃の夢に向かって進んでいますか？SMAPの「夜空ノムコウ」という曲の中に、「あの頃の未来に僕らは立っているのかなぁ」という歌詞が出てきます。君は、あの頃の未来に立っていますか？

先日の日本経済新聞に「なりたかった職業を実現した人は7%」という調査結果がでていました。殆どの人は「あの頃の未来に」立てていない、夢は実現していないのです。僕はそれが現実の姿だと思います。

夢を断念した理由はたくさんあると思います。才能、学力、経済力、やってみたらそれほど面白くなかった、夢自体が変わってしまった、などなど。

僕は、砂漠に大きな製鉄所を作るという海外プラント建設に大きな夢を持って会社に入りました。しかし、結婚し子供ができてみると、単身で何年も未開の奥地で暮らすようなプラント建設という仕事に魅力を失ってしまいました。

また、会社を辞めて独立した時、経営コンサルタントのような口先だけ（僕はそういう印象を持っています）の職業は選ぶまいと考えていました。それが紆余曲折の中で、今は経営コンサルタントのような仕事をしています。しかし、実際やってみると、そこに自分を必要としてくれている人がいて、そこで成果をだして喜ばれる。本当に幸せな気持ちになれます。

仕事はやってみなければわかりません。自分の才能がどこにあるのかも実際に仕事をしてみないと見極めようがありません。初めから楽しいと思うような仕事はすぐに飽きてしまいます。考えようによっては仕事なんてどれも「くだらない」ものです。でも人は皆、その「くだらない」仕事の中に、その人なりの意味を作りだしているのです。

「やりたい仕事」を探すには、先ずスタートを切ることです。机の上でいくら考えてみても、「自分が何に向いているか」「自分のやりたい仕事は何か」なんて分かりません。極論すれば、どんな仕事だっていいから、先ずは行動を起こすことが大切だと思います。

以上

(文字数：906文字)

第4回

「現場で汗を流すことの大切さ」

僕が採用担当をしていた頃、面接に来た学生に希望職種を聞くと、「企画」とか「人事」とか「広報」とかの答える人が多かった。何かカッコいいイメージがあるのだろう。しかし、そのようなカッコいい部署で働いている人も、若い頃は現場を嫌というほど経験している場合が多い。

知り合いに、高校を卒業し15年程レストランのウェイターとして働き、今は8店舗のレストランを経営して大成功している人がいる。彼が成功しているのはレストランの現場で汗を流してきたからだ。料理と値段のバランス、お客さんの心のつかみ方、繁盛店にする仕掛け作り。ビジネスの成功のカギは全て現場にある。

「神々は細部に宿る」という言葉ある。本当に大切なことは些細なことの中にあるという意味だ。そしてその神々は現場に這いつくばって苦勞している人にしか見えない。現場で汗を流した経験のない人は薄っぺらい事しか言えない。僕が勤めていた会社では、過去に新人をいきなり「企画」とか「広報」に配属したことがあったが、そのような人はその後あまりパツとしなかった。

現場で苦勞しているといいことがたくさんある。自信がつく、弱い人の気持ちが分かるようになる、仕事に関する直感が働くようになる、といったことだ。

僕は、仕事ができる人になるために大切なことは、「人の心をつかめること」と「仕事に対するセンス（感覚・判断力＝直感）」だと考えている。それらの能力は現場に這いつくばって仕事をする中でのみ磨かれるのだ。MBAを取得しても、これらの能力は高まらない。

今、カッコいい仕事に就いていないと思っている皆さん。そのことは皆さんの将来にとってとてもラッキーなことだ。毎晩、飲み屋で愚痴を言い、憂さ晴らしをしながら、今のカッコよくない仕事を続けてもらいたい。「うっせーなー、このクソじじい！」なんて心の中で言いながら仕事をしている中に、本当に大切なものがあるのだと思う。

以上

(文字数：792文字)

第5回

「人の心をつかめる人」

前回、仕事をする上で大切なことの一つが「人の心をつかむこと」だと書いた。営業マンとお客様の関係、上司と部下の関係、技術者にとっての商品開発、全てが「人の心をつかめるかどうか」にかかっている。

先日、ある有名大学の先生の講演を聞く機会があった。暗い会場でスライドを使って講演されたせいもあるが、3割くらいの方が眠っていた。全く内容が面白くないのだ。聞きに来ているのは学者ではなく普通の人達だ。普通の人に学術的な小難しい話しをしてもわかるはずがない。最も悪いのは、その先生に聞く人のことを思う気持ちがないことだ。3割の方が眠っているのに、おかまいなしに自分の話したいことだけを話して講演を終わられた。

僕には、尊敬する小学校の先生がいる。息子を教えて下さり、今は同じ小学校で娘を教えて下さっている先生だ。この先生はいつも一人ひとりの児童のことを心から考えて下さっている。授業がとにかく面白い。参観日でも父兄も含めて爆笑の渦になる。児童の注意が先生に注がれた中で、大切なことを要領よく教えてゆかれる。

世間の評価から言えば小学校の先生より有名な大学の先生の方が偉いのかも知れない。しかし、教育者という意味からいえば、この小学校の先生の方が百倍偉いと思う。

仕事に貴賤がないというのは正にこのことだ。何かに人生を賭け、他人の幸せのために一生懸命な人は本当に素晴らしい。その小学校の先生は息子の卒業式に「だれに見られなくてもいい、どんなに小さくてもいい、自分を活かした花を咲かせて下さい。」と言って下さった。一人ひとりの児童のことを本当に愛して下さっていた先生の心が伝わってきた。

人は金や地位や名誉にすぐに心を奪われる。そんなつまらないものに心を奪われる人ではなく、人の心をつかめる人になりたいものだ。

以上

(文字数：742文字)

第6回

「みじめな思い」

ビジネスは詰まるところ人だと言われる。どんな仕事も人を通して行われる。ビジネス上の問題の殆どは人に絡むものだ。「あの人は一緒に仕事できません。」「あいつのここが問題なんだよな〜。」職場ではこんな話をよく耳にする。また、販売する商品やサービスに問題があるのも、商品を作ったりサービスを提供したりする人に問題があるのだ。

そして、それら人の問題が起こる理由のほとんどがコミュニケーションに起因する。そういう意味で、「人と心を通わせる」ということは仕事をする上で極めて重要な能力なのだ。では、どうすれば、「人と心を通わせる」ことができるのか。そのポイントは相手の立場に立てるかどうかだ。言うのは簡単だが行うのは難しい。

特に優秀な人には、人の気持ちが判らない人が多い。出来る人は、出来ない人の気持ちや出来ない理由が分からないのだ。以前にも息子の話しを書いたが、僕は $1/2 + 1/3$ の計算が出来ない息子が、どこでつまづいているのか皆目わからない。僕からみれば息子は「頭を使ってない」としか思えないのだ。

そんな人にとって「みじめな思い」をすることはとても大切だ。僕は会社を立ち上げてから食っていけない日がかかり続いた。そんな頃、五反田でサラリーマン時代の仲間と飲んだ。久しぶりにとっても楽しくて、気がついてみれば最終電車が出た後だった。友人達はタクシーで帰っていった。僕の家は東京から遠く、タクシーの深夜料金だと2万5千円かかる。財布にお金がなかったわけではないが、2万5千円といえばその当時きりつめて生活していた家族の2週間分の食費だった。それを考えるとタクシーでは帰れなかった。五反田駅の近くのどぶ川のほとりのベンチで始発電車を待った。みじめだった。本当にみじめな気持ちで一杯だった。

しかし、そのようなみじめな経験を積み重ねることで、少しは人の情けがわかるようになったのではないかと思う。苦しい時に手をさしのべてくれる人のありがたみが心に沁みた。だれもが、かけがえのない人生を一生懸命生きているのだと思うようになった。このような気持ちこそが、人と心を通うわせるために必要なことではないだろうか。

ビジネスはスキルやテクニックばかりではない。「人と心を通わせる」そんなことをいつも考えながら仕事を楽しんでもらいたい。

以上

(文字数：954 文字)

第7号

「やる気と辛抱」

多くの学生は期待に胸膨らませ社会に出る。しかし、多くの新人が仕事をやり始めるとやる気を失う。「やるぞー！」と思って会社に入ってみたものの、実際の仕事はそう簡単ではないし面白くもない。思っていたような成果も出ない。殆どの新人がそういう経路をたどる。この傾向はどの国でも同じだ。

やる気の研究で有名な二要因理論というものを紹介しよう。あるものがあれば仕事に満足を感じるがそれが無くても不満にはならないものを「動機づけ要因」、あるものが無ければ不満になるがそれがあってもそう満足にはならないものを「衛生要因」と言う。

給料などが衛生要因だ。給料が少ないと不満になるが、給料が高いからといって仕事に満足感が生まれるわけではない。考えてみてほしい、今の仕事が面白くないと思っている人が、給料が2倍になったからといって仕事が面白くなるだろうか。仕事は相変わらず面白くないままだが、こんな「オイシイ」会社は辞めまいと思うくらいなものであろう。

では、仕事自体に満足を与える要因とは何か。それは「達成」、「承認」、「責任」、「成長」などである。人は成長し、何かを達成し、それが回りから認められ、更に大きな責任を与えられるというサイクルの中で、自分の仕事が面白くなるのだと思う。

ただ、大変であり大切なのは成果が出るまで辛抱できるかどうかということだ。どんな仕事も最初はうまくいかない。私は研修講師をしているが、私の最初の講演はだれも聞いてくれず、そのことでパニックになり、何分もの沈黙が何度も続いた。今思い出しても冷や汗がでるような経験だった。

仕事だけではない。人生自体がうまくいかないことだらけだ。私は3日前に財布を落とし、昨日はコンピューターが起動できなくなり修理に出さなければならないことになった。しかし、ここでやる気を失っていてもどうしようもない。更に悪くならないように手を打って、今出来ることを考えるしかないのだ。

仏教に「苦は楽の種」という言葉がある。苦しまないと本当のものはつかめないし、苦しんだ経験こそが、その後の人生を送る上での財産になるのだ。今の苦しさを、自分に与えられた試練だと思って頑張ってもらいたい。

月並みな言葉だけど、最後に次の言葉を頑張っている皆さんに送りたい。「今の不安・苦しきは、それを乗り越える勇気のある者だけに与えられるチャレンジだ。」

文字数：974

第8回

「自分で考える」

僕が学生だった頃は今から20年以上前になる（自分で書いていてぞっとする・・・）。僕も、悩み多き学生の御多分に洩れず「人生いかに生きるべきか」などということを考えていたものだ。

人類の長い歴史があり、頭のいい人も数えきれないほどいるのだから、たぶん「正しい生き方」いうものがあるに違いないと思っていた。図書館や本屋さんに通っては「人生論」に関する本を読み漁っていた。しかし、結局「正しい生き方」なるものは発見できずに終わった。

確かに尊敬できる生き方はある。それは、歴史に名を残すような有名人でなくても、自分の身の回りにもいる。でも、それら尊敬できる人の生き方をそのままコピーすることはできない。時代背景も違うし、能力も性格も考え方も違う。結局どう生きるべきかは、それぞれの人が自分の頭で考えるしかないのだ。

最近、中学生の息子に勉強を教えることがある。僕は算数と理科が大好きだが、息子は最大の苦手だ。簡単な問題さえ解けない。僕が少し教えるとかなり解けるようになる。そういう意味では、若い人達に適切なサポートは必要である。

しかし、こうやって簡単に手助けをするから、自分で考えたり、解き方自体を自分で探したりといった態度が育まれないのだと思う。僕は小学校の同級生が15人しかいない山村の出身だから塾に通った経験もない。親戚にも大学に行った人もいない。答えの導き出し方も勉強の仕方も、何もかも自分で考えるしかなかった。そういった、自分で考え、自分で解を見つけ出すといった態度が、職を転々としても何とかやってこれた理由ではないかなと思っている。

昔から、日本の教育の方法は厳しい。職人さんの世界では若い人に何も教えないのが一般的だ。すぐに出来るようになるより、自分自身で考え、自分で解を導き出す態度を養っておくことの方が、遠回りをしているようで実は生きて行く上では最も重要だということなのだろう。

西洋式の理論や方法がもてはやされるが、日本の伝統ややり方には真を突いているものが多いと思う。

以上

（文字数：830文字）

第9回

「想いを描く」

新年あけましておめでとうございます。今回は新春にふさわしく「想いを描く」を題材にしてみたい。

あなたには人生のビジョンがありますか？この一度しかない人生をどう生きたいですか？

僕は保険のおばちゃんや人事部が用意する人生の設計図が大嫌いである。「30歳で結婚し、35歳で第一子、38歳で第二子が生まれ、42歳で家を購入し、60歳で定年退職する。あなたの生涯賃金はどれくらいで、支出はどれくらいだから、これくらいの貯蓄とこの程度の生命保険が必要だ。」なんていう人生のスケジュール表のことだ。

なぜなら、人生は思い通りには行かず、環境に影響され、人との出会いによって人生の航路が大きく変わってしまう。人生とはそういうものだと思うし、将来が見えないからこそ人生はエキサイティングなのだと思う。

しかし、先日家の机の引き出しを整理していたら、25歳の頃に僕自身が書いたメモ書きが出てきた。そこには「30歳位で結婚し、30歳後半に会社に残るかどうかを決断し、40歳前に家を持つ。」と書いてあった。

これを見て少し驚いた。殆ど25歳位の時に描いた通りの人生になっているのだ。確かに、今は技術者ではなくなっているとか、夢見ていたプロジェクトマネジャーにはなっていないとか、計画通りにいってないこともたくさんある。しかし、概ね自分の思い通りの人生になっているとも言える。

世に成功哲学なるものがある。僕は金持ちになるための成功哲学は嫌いだ。経済的に成功することだけが価値ある人生だとは思えない。しかし、自分の人生を主体的に生きようとするのは大切だと思う。自分らしく生きる人生を「成功した人生」と呼ぶなら、成功哲学は大切だ。成功哲学の基本は「望めよ、さらば叶えられん」である。つまり、どうなりたいかを強く想い描くことが大切なのだ。人に想いがなければ、それはただ流されているだけの人生だ。

人生は思い通りにならない。それを十分承知の上で、やはり皆さんに言いたい。「あなた自身の人生をどう生きたいのか、どのような人生を望むのか、いつも自分に問い続けてもらいたい」と。人生は一度しかなく、自分が自由にできるのは、唯一自分の人生だけなのだ。大切にしてもらいたい。

以上

(文字数：911文字)

第10回

「価値観」

前回は「想いを描く」というテーマで書いた。「想いを描く」とは、人生のビジョンを持つことだ。ビジョンには「将来のイメージ」だけでなく、「有意義な目的」と「明確な価値観」が含まれていることが必要だと言われている。

将来のイメージを描く時、それがあなたにとって有意義なものでなければ意味がない。「自分がなぜ生きているのか」という問いに対する答えだ。次に価値観。あなたのビジョンはあなたの価値観に大きく左右される。人はそれぞれの価値観を持っている。そして、人は自分の価値観に沿って生きている時、幸せを感じる。

以前僕は、「今でも本当に自分が何をやりたいのか分からない」と書いた。恥ずかしながら偽りのない事実だ。しかし、僕は少なくとも自分の価値観だけはしっかりと整理している。

サラリーマンを辞めて、これから何をして生きていこうかと考えた時、先ず自分の価値観を整理した。大学進学、就職、結婚、留学、退職などの人生の大きな節目での決断の理由を振り返った。僕は以前に職場での劣等感から、うつ病に近い状態になった。また、不治の病だと診断された時もあった（それは結局は誤診だったのだが）。そんな時何を考えたかも参考にした。更に、自分が素敵だと思う人の生きざまが、なぜ素敵だと感じるのかを自分に問うことでも自分の価値観が見えてくる。

僕にとって大切なことを言葉で表すと「貢献」、「変革」、「個性」、「挑戦」、「正義」となる。自分の価値観を整理することを自己分析と呼ぶのかもしれない。しかし、「自分とは何か」というような難しい質問をするより、自分が大切にしている価値観を整理するほうが簡単だ。

今のあなたに将来の明確なビジョンがないとすればなおさら、今はあなた自身の価値観に沿っていきたくることが大切だと思う。

若い人と話しをすると「自分らしく生きたい」という言葉をよく耳にする。「自分らしく生きる」とは特別な何かをすることではなく、その時その時の自分の価値観に従って決断して進む、そのかけがえのない自分だけの人生こそが「自分らしく生きる」ということだと思う。自分の価値観を明確にし、あなたらしく生きてもらいたい。

以上

(文字数：891文字)

第 11 回

「落ち込む時」

「想いを描く」とか「人生のビジョンを持つ」とか、前向きなことを 2 回ほど続けて書いた。だが、人間は複雑であり、いつも前向きばかりには生きていられない。僕自身は典型的な躁鬱（そううつ）型の人間であると自覚している。若い時は会社に出られなくなることもあった。年齢が 40 歳も過ぎると多少コントロールもできるが、今でもよく落ち込む。

落ち込むと、やる気が出てこない、自信がなくなる、人と会うのがおっくうになる、自分が嫌になるといった状況になる。こんな時に「想い」だ「ビジョン」だなどと言われると、よけいに気がめいる。

落ち込む理由は様々だ。仕事がうまく行かない、仕事で失敗した、人からバカにされた、悪く言われた、自分の理想の姿と現実のギャップの大きさに悩む。こんなことがきっかけになって、元気がなくなり、自分の悪い面や嫌な面ばかりに目が行くようになる。

歳をとってひどいうつ状態にならないのは、うつ状態になりかける時にいろんな手を打てるようになったからだと思う。うつ状態になり始めたら、先ずはあまり無理をしない。同時にうつ状態がひどくならないように、必要最低限のことは無理をしてでもやる。会社には必ず出勤する、整理整頓する、最低限の仕事は続けるとかである。何もかもやらなくなり、人と会わなくなると、状況は加速度的に悪くなるからだ。

もう一つ大切なことは、うつ状態になっている自分というものを認めることだ。うつになりやすい人は、几帳面で繊細で、こだわりが強くてまじめな性格の人が多いと言われている。こういった性格自体は人間的にも仕事をする上でも悪いものではない。

そういういい面を持っているからこそうつ状態になるのである。良い面・悪い面、ひっくり返して自分を認めることが大事である。理想だけに目をとられず、目の前の自分に与えられた仕事を一つひとつこなしてゆくことも大切だ。

そうやって、自分を全人的に認め、最低限の生活を維持していれば、素敵な人から元気をもらったり、苦しい中で頑張っている人に感動したりする。そんな中で、元気が少しずつ回復してくる。

後ろ向きの感情や考え方だけにとらわれるのではなく、自分の良い面を見、自分を肯定し、素敵な人達と会い、自分のペースで少しずつ人生を歩んでゆこうではないか。

以上

(文字数 : 936 文字)

第12回

「カッコいい生き方」

前々回のコラムで「その時その時の自分の価値観に従って決断し、あなたらしく生きてもらいたい」と書いた。そう言うと、「フリーターでも何でも、自分で決めたからそれでいいんだ」と妙に安心した人もいたのではないだろうか。

確かにそうだ。自分の人生をどう生きるかはその人が決めればいいのか。でも、出来ればカッコよく生きてもらいたいと思う。別に夢を追いかける人生とか、ビジネスで成功するとかといったカッコよさでなくていい。ただ、最低限自分の力で生きてゆける人間になって欲しいと思う。

僕は子供達にいつも「仕事なんて何をしてもいい。自分のやりたい事をやればいい。ただ、少なくとも自分の足で立って生きていける人間にはなってくれ。」と言っている。

いろんな理由をつけてみても、結局いい大人になって親に食わせてもらっている人生ってカッコ悪いと僕は思う。人間は基本的に自由だ。どんな人生を送ってもいい。しかし、自由を主張する時には必ず責任が伴う。それが大人の世界だ。

「会社で偉くなりたいとも思わない。」「たくさんのお金がほしいとも思わない。」そういう若者の感覚はとても自然だ。偉い人が私利私欲にまみれ、平気で悪いことをする世の中を見ていれば、そう思うのも当然だ。

会社で偉くなるとか、お金持ちになるとか、そんなことはどうでもいい。自分の人生を誰かと比較する必要もないし、人からどう言われてもかまわない。ただ、自分の心に聴いてみて、自分に誇りを持てる人生を送ってほしいと思うのだ。

以上

(文字数 : 623 文字)

第13回

「若い時の苦勞は・・・」

このメルマガの原稿を引き受けることになった時、若い人達に説教だけはすまいと誓った。しかし、毎回説教じみた話しをしている自分に気付く。若い頃、僕は説教されるのが嫌だった。「それはアンタの価値観だろ！」と言いたくなることがよくあった。しかし、年をとってくると、昔の人が言っていたことの本質が少し分かるようになってきた。

その中に「若い時の苦勞は買ってでもしろ」というのがある。僕は今、中小企業のコンサルタントと大手企業の新任管理職研修を主な仕事にしている。どちらが大変かという点間違いなく中小企業のコンサルだ。会社毎に課題が異なるから会社毎に違う仕事をしなければならない。会社が倒産するかどうかというようなきわどい場面にも直面する。

一方研修講師の方は、評判のいいプログラムが作れば、基本的に同じことをやっていればいい。同じことを繰り返すからレベルも上がってくる。プログラムの完成度も高まる。効率もいい。

しかし、現場の苦勞をせずに研修講師だけやっていると、やがて受講生からそっぽを向かれる。受講生の方が切実な問題を抱えているから、講師が受講生の心をつかめなくなるのだ。

現場の大変な仕事を逃げずに辛抱してやっている人は、仕事をする上で大切な何かを持っている。スキルとかテクニックではない。その人の心と体が覚えている何かだ。仕事ができる人は、苦勞を神が自分に与えてくれた試練であり、自分にとってのチャンスだととらまえられる人が多い。

自分の人生を振り返ってみても、苦しい時の経験が財産になっている。「若い時の苦勞は買ってでもしろ！」もう若くはないが、自分にも言い聞かせながら仕事をしてゆこうと思う。

以上

(文字数：693 文字)

第14回

「感謝できる人」

人に感謝できる人は素敵な人が多いし仕事ができる。僕は中小企業の社長さんと話しをすることが多いが、事業がうまくいっている会社の社長さんは決まって「うちの社員は本当に良く働いてくれる」と言い、業績の悪い会社の社長は「うちの会社にはロクなヤツがない」と言う。

社長さんだけでなく一般のビジネスパーソンでも、仕事の出来る人は「たくさんの人にお世話になって今の自分がある」と思っている人が多い。ヤレ会社がダメだの上司が悪いだのと言っている人で立派な仕事をしている人は少ない。

考えてみれば、会社は僕達に成長の機会を与えてくれ、そのうえ給料まで出してくれる。僕達は多くの人に助けられ何とか仕事をしている。だが僕達はそんなことには気づかなかったり忘れてたりして、会社や上司の悪口ばかり言っている。

僕達はいつも自分を中心に考えている。常に「自分が正しい」と思っている。自分に相応しい仕事は何か、自分らしい人生とは何か、いつも自分のこと、自分の幸せのことばかり考えている。しかし、自分のことばかり考えていて人は本当に幸せになれるのだろうか。

僕は中学・高校と一生懸命勉強した。大学に入ってからでも勉強した。それは勉強が好きだったからというより、とても貧乏だった父母が多くのことを犠牲にして僕に勉強できる環境を与えてくれたことに感謝していたからだ。貧乏だったけど、あの頃が一番一生懸命で一番幸せだったかもしれない。

だれかに感謝できる人は前向きなエネルギーを持つ。感謝できる人とは、与えられていることを認識できる人である。人は何かを与えられればそのお返しをしなければならないと思う生物である。これを「返報性」と呼ぶのだが、この返報性は地球上の全ての民族が持っている行動原理だ。

会社に、上司に、同僚に、そしてお客様に感謝できる人は、その人達のために何かしなければならないと思う。これが仕事上でのエネルギーに繋がるし、本人の幸せにも繋がるのだと思う。

あなたは今、周りの人に感謝していますか？

以上

(文字数：825 文字)

第15回

「誠実に一生懸命に」

社会に出て働くことに不安を持っている人が多い。自然なことだと思う。中年の僕でも、新しい仕事を始める時は不安を感じる。仕事経験の少ない若者が不安を感じるのは当然だ。

しかし、若者には特権がある。仕事経験がないのだから失敗して当然、うまくいなくてあたりまえなのだ。大切なことは、うまくできるかどうかより、与えられた仕事を誠実に一生懸命やっているかどうかだ。

君がレストランでウェイターとして働きだしたと仮定しよう。先輩社員は何枚もの皿を腕に乗せてさっそうとテーブルの片付けをする。君は2枚の皿を運ぶのがやっとだ。しかし、もし君がお客様のために誠実に一生懸命に仕事をしているなら、お客様は間違いなく、先輩社員ではなくて一生懸命な君に感動する。

もう一つ例を出そう。僕の息子は僕に似て運動神経が悪い。息子が小学6年の時に学校対抗のドッジボール大会があった。学校毎に4年生から6年生で編成された3チームが出場した。我息子は敗戦処理チームのキャプテン、つまり運動神経の悪いメンバーばかりを集めたチームのキャプテンだった。見るからに体も小さく、どんくさそうな子供達の集まりだ。親としては、監督もひどいことをするものだと思った。

しかし、ゲームが始まると、我息子はコートの中真ん中で大きく両手を開き、年下のどんくさいメンバーを自分の後ろに隠し一生懸命戦っている。ただ、テレビドラマとは違い、奇跡がおきることはなく、息子はあえなくやられてしまった。

試合が終って家に帰ってから、無茶苦茶に息子をほめてやった。たくさんの観客の前であんなカッコ悪い姿を見せられるものではない。僕だったら、攻める役にまわるなどして、自分が恥をかかないようにすることだけを考えていただろう。

人間として大切なのは、うまくできるかどうかではなく、いかに誠実に一生懸命に仕事に取り組んでいるかだと思う。

そんな誠実で一生懸命な姿を見た時、人は感動する。そして人は感動によって動かされる。人を感動させられる人間なんてそうざらにはいない。だから素晴らしいのだ。

君達も、まずは仕事がうまくいくかどうかを気にする前に、自分が目の前の仕事を誠実に一生懸命やっているかどうかだけを考えてもらいたい。そうすれば不安も自ずと軽くなると思うのだが。

以上

(文字数：935文字)

第16回

「勉強する」

僕は今までいろんな仕事を経験してきた。もともとは技術屋で、海外に製鉄所を建設する仕事をしていた。製鉄機械の設計、現場での工事監督、操業後の指導などだ。次に人事部に移って採用担当、経営企画部で事業再建プロジェクトの事務局、海外企業との合併交渉もやった。

それら色んな仕事をしてきて感じるのは、仕事はどれも同じだということ。確かにやっていることは違う。けれども次の二つのことはどの仕事にも共通する。

1. 全ての仕事は人を通して行われる
2. 仕事とは全て課題解決である

全ての仕事は人を通して行われる。これはもう説明する必要はないと思う。僕のような自営業でも、仕事は人を通して行われる。そして、この「人を通して行われる」ということがとても大切なので、僕のコラムでは人のことを中心に書いてきた。

また、仕事は全て課題解決である。2年間で製鉄所を作りあげる。1年間で300人の新人を採用する。どの仕事も目標があって、その目標達成のために計画をたて実行してゆく。多くの新人が取り組んでいる営業活動もそう。営業目標があって、それをどう達成するかを仮説を立て実行し、その結果を検証し次のアクションにつなげてゆく。

仕事は課題解決であるが、新人にとっては、誠実に一生懸命やるのが先ずは大切だと前回書いた。けれど、「誠実に一生懸命」だけでいつまでも勝負できるわけではない。仕事を少しやると分かるが、誠実に一生懸命だけでは課題が解決できないのだ。

課題を解決するには経験が必要だ。これはどうしようもない。時間をかけて経験を積んでゆくしかない。もう一つ大切なのは、知識や専門性を高めてゆくことだ。これは勉強してゆくしかない。

世の中には競争があるから、お客様はレベルの高いものしか選んでくれない。レベルの高いものになるためにはやはり精進が必要だ。仕事のできる人は本当によく勉強をしている。学校を出たから勉強が終わりなのではない。学校を出てから本当の勉強が始まるのだ。

20代にしっかり働きよく勉強した人は30代に花開く。30代にしっかり働きよく勉強した人は40代に花開く。人生はよくできているものだと思う。勉強してもらいたい。

以上

(文字数：894文字)

第17回

「奇跡」

一週間程前から左眼が急に見えなくなった。すごく濃い霧の中にいるようで、物の形がおぼろげにつかめる程にしか見えない。ブドウ膜炎という病気、原因不明だ。

「片目が見えなくなったら黒い眼帯でもしよう。そうすれば講師業にも迫力が増す」などと冗談を言っていたが、右目もかすんできた時には焦った。このまま両目が見えなくなると仕事が出来なくなる。コンピューター画面を見ることも、こうして文字を書くことさえ難しくなる。自営業の私にとっては死活問題だ。

僕達は自分の体が正常に動いていることを当然のことだと思っている。体が正常に動いていることを前提に、やりたいことが見つからないと言って悩んだり、思い通りに行かないことに腹を立てたり、めぐまれていない自分の才能に嘆いたり、いつも愚痴や不満を言いながら生きている。

しかし、考えてみれば僕達がこうして生きて普通に生活していること自体が奇跡である。心臓も肺も自分の意志で動かしているわけではない。繊細で膨大な人間を構成する全ての器官が正常に動いているから僕らは生きていられるのだ。こう考えると、何か人知を超えた偉大な力に感謝せざるを得ない。この偉大な力のことを科学の世界では **Something Great** と呼ぶし、宗教の世界では神や仏と呼んできたのだろう。

「このまま眼が見えなくなるのではないか」という恐怖の中で僕の心に生じたことは、今生きているというこの奇跡に感謝し、自分の人生をもっと大切にしたいという思いだった。

だからと言って今すぐに自分の人生が180度変わるわけではない。しかし、日々の生活の中でもっと自分の心に素直に耳を傾けようと思った。あるべき論ではなく、自分が本当にワクワクすることは何か、自分を活かせる道はどこか、もっと真剣に考えたいと思った。

ありがたいことに眼は少しずつよくなっている。「ありがたい」とは「有難い」、めったにないほど尊いから「ありがたい」のだそうだ。まさに生きているそのこと自体がありがたいのだ。この生きている奇跡の有難さに感謝して、大切に人生を使わせてもらおうと思う。

以上

(文字数：849 文字)

第18回

「自分へ矢印を向ける」

「最近の若いヤツらは・・・」と、おじさん達が若い世代を非難する言葉をよく耳にする。しかし、少なくとも私が接する若い人達は本当にいい子が多い。考え方もしっかりしているし、1～2年も仕事をすればもう一人前だ。

僕が新人だった22年前は本当につまらない仕事をしていた。その頃はコンピュータが今ほど普及していなかったから、僕ら新人の仕事は資料の切り貼りだった。今はコンピュータ上で行うカット&ペーストを手作業でやっていた。過去に作った資料から必要な部分を切り取って貼り合わせ、コピーしても紙の境目の線がでないようにメンディングテープで紙の境目を貼る仕事だ。そんな頭を使わない作業ばかりしていた。それに比べれば今の若い人達はレベルの高い仕事をしていると思う。

ただ、今も昔も変わらないことと言えば、入社後1～2年すると会社の問題が見えてきて不満だらけになることだろう。大企業に勤める新人は硬直化した組織に不満を持ち、中小企業やベンチャー企業に勤める新人は、社内の仕組みが何ひとつ整っていないことに不満をためる。

どこの会社でも若い人達が集まると会社や上司の悪口に花が咲く。そういう僕も例外ではなく、若い頃は飲みに行けばいつも会社の問題点をあげつらっていた。そんなある日、同じ酒場に人事部長がいるのを発見し、日頃の不満をぶちまけた。彼はただ「お前達も成長してきたな。その勢いで頑張れ！」と言っておごってくれた。説教も批判もなかった。彼が言いたかったことは、「君達の問題意識は間違っていない。で、その問題に君達はどう取り組んでいくんだ？」ということだったのだろう。

その後も不平不満を言いながら15年程が過ぎた頃、僕達の同期で飛びぬけて優秀だったヤツが、彼より年上の部下ばかりが10人ほどいる部門の管理職になった。彼に「大変だろうな～」と言ったら、彼は「全く大変なことはない。彼らが気持ちよく働いてくれるようにすることが僕の仕事だから」と答えた。

「やっぱりすごいヤツは言うことが違うな」と思うと同時に、いつも愚痴や不満ばかり言っていた自分が恥ずかしくなった。

問題はどこの職場にもある。立派な人間は常に矢印が自分に向いている。自分に矢印が向いてない人間はいつも他人の悪口ばかり言っている。立派な人間に近づきたいものだ。

以上

(文字数：946文字)

第19回

「関係性」

エドワード・デシという心理学者がいる。内発的動機付けの研究で世界の第一人者だ。内発的動機付けと外発的動機付けについては以前にも書いた。自ら仕事がしたいと思うことが内発的に動機付けされた状態であり、アメとかムチといった仕事以外のものを使って仕事へのやる気を起こさせることを外発的動機付けという。

エドワード・デシは、内発的動機付けに必要なものは「有能感」「自律性」「関係性」だと言っている。若い人達を見ても、やる気を失っている人は、これら3つのうちのどれか、もしくは全てがうまくいっていない例が多い。

「有能感」とは「自分は出来る」という感覚である。営業成績がいい新人はやる気満々だが、営業成績が出ていない人はどこもなく元気がない。やり方がわからないとか、成果を出すまでのプロセスがイメージできない場合にも有能感は損なわれる。

有能感を失っている人は、自分がどこでつまづいているのかを分析し、先輩に教えてもらったり、先輩のやり方を見せてもらったりして「自分は出来る」という気持ちをつかむことが必要だ。また、成果が出始める時期は人によって異なるし、短期の営業成績が高い人が常にビジネスパーソンとして素晴らしいわけではない。いろんな視点を持つこと、そして自分を信じることが大切だ。

「自律性」とは「自分が決めている」という感覚である。素直に上司の言うことを聞き、いつも上司の命令に従っている新人はいい子である。しかし、本当に仕事ができる人は、決して上司の指示通り動いてきた人ではない。常に自分で考え、自分で行動してきた人だ。そんな人は仕事に対して意欲的だ。

「関係性」とは「周りの人との良好な関係」である。やる気を失っている人は周りの人との信頼関係が損なわれている場合が多い。それは会社や上司に問題がある場合もあるが、本人にも何がしかの問題はある。

人間関係はいくつになっても難しい。考えてみれば世の中は変人とどこか欠けた所を持った人達の集まりであるとも言える。自分とは違う考えや行動は嫌になるし腹立たしいことさえある。けれども、自分とは異なる人達の良い所を認め、同じ方向に向かって歩もうと心が一つになる時は本当に気持ちがいい。

組織における関係性が良ければ、どんなにつまらない仕事をしていても不満にはならない場合が多い。「関係性」が人のやる気に一番大きな影響を及ぼすのではないだろうか。

以上

(文字数：984文字)

第20回

「自律」

先日ある会社の社長さんと話をしていたら、「うちの会社の社員は当事者意識や問題意識が足りない」というお話をしておられた。これはどこの会社に伺っても、社長や企業幹部の方が口をそろえて言われることだ。

企業研修のテーマで最も多いのは「自律」である。だれかに指示されたり助けてもらったりするのではなく、自分の考えで行動することが全てのビジネスパーソンに求められている。優秀なビジネスパーソンになりたいければ「自律」すればよいのだ。

このことを若者はどう受けとめてくれるだろうか。「お金持ちになりたいとも思わないし、出世もしたくない。」と若者は言う。でも、殆どの人はいい仕事をしたいと思っているし、認められたいとも思っている。そう思うのなら・・・。

自律している人は視点が高い。言われたことを一所懸命やるというよりは、自分から仕事を作りだしている。常にワンランク上の視点で仕事をしている。上司が自分に何を期待しているのかをいつも意識し、その期待以上の何かを提供しようとしている。

僕のリーダー研修のテーマも基本的には「自律」である。リーダーとしての自分の役割に気づき自己変容しなければならぬということだ。リーダーになれば自分が一生懸命仕事をしているだけではダメで、他人のやる気や能力を引き出すために何ができるかを考えることが仕事になる。この役割変化に気づき自分の行動を変えられる人だけが、社会で認められる優秀なビジネスパーソンになってゆく。要は一つ上の視点を持てるかどうかだ。

もう一つ大切なことは、仕事に対する覚悟だ。昇格面接のために目標シートの記入にミスはないかなどと神経質になっている人がいるが、そんなシートの書き方などどうだっていい。昇格するかどうかは「私はこれをやり遂げる覚悟です！」と面接官の目をじっと見て言えるかどうかなのだ。仕事ができるとは、この腹の据わり方をいうのだと思う。

「会社の中で上を目指せ」なんて言っているのではない。どこに出ても恥ずかしくない立派な企業人になってもらいたい。自分の力で生きてゆけるたくましい人間になってほしい。そのためには先ず、「自分はこれをやります！」と自ら言える人になることが大切だと思う。

以上

(文字数：909 文字)

第21回

「ビジネスDNA」

スポーツの世界でも政治の世界でも2世が活躍している。相撲、陸上、体操など多くの分野で親子が、それも同じ競技で活躍している。これを見ると、遺伝的というか先天的な能力の優劣があることを感じる。政治の世界では能力というより人脈の方が影響力が大きいのかも知れないが、いずれにせよ二世、三世議員の数は多い。

それに比べるとビジネスの世界では2世経営者というのはあまり活躍していない。2代目経営者は創業社長に比べ力が劣る場合が殆どだ。

世の偉大な経営者を見るとその親が偉大な経営者だった人はあまりいない。逆に親が事業で失敗した人や、貧しい家庭に育った人が偉大な経営者になっている。居酒屋「和民」を展開する渡辺社長、コムスの折口社長、二人共お父さんは事業で失敗している。ソフトバンクの孫社長、ライブドアの堀江社長、二人とも中流以下の家庭の生まれである。

そういう意味では、ビジネスの世界を選んだ僕達は幸せである。優れたDNA持っていなくても成功する可能性はあるし、親の人脈がなくても活躍できるのだ。ビジネス社会は我々に平等なチャンスを与えてくれる世界、正に自分次第の世界なのだ。

ビジネスの世界ではなぜDNAがあまり効かないのか。いろんな理由があると思う。まずは世の中が複雑系だということだ。仕事は頭がいいだけではできない。人間関係力、センス、粘り、努力などいろんな要素が必要になってくる。

仕事は経験しなければ実力は上がらない。多くの経験をし、多くの失敗をするほど学ぶことも多い。失敗してみじめな思いをすれば、人の気持ちが分かってきたり、腹が据わってきたりする。「優しさ」と「勇気」、この二つが仕事をする上ではとても大切であったりするのだ。

何のしがらみもなく、チャンスが平等に与えられているビジネス世界。スポーツの世界や政治の世界に比べればなんと幸せなことか。自分次第でどうにでもなるこのビジネス社会で、大いに暴れてくれ。

以上

(文字数：801文字)

第22回

「心の支え」

仕事を始めて間もない若い人達と話をする、それぞれに大きな悩みを抱えている。新人にしては厳しすぎる境遇にいる人もいる。辛いだろうと思う。しかし、おじさんの視点でそういう人達を眺めると、やはり彼らはいい経験をしていると思える。

辛抱することはとっても大切なことだ。辛抱する、つまり辛さを抱いて生きてゆくことで人は磨かれるのだと思う。

どんなに厳しい状況であっても、それで命を奪われるわけではない。いつかは何らかの解が見つかるものだ。少しスローダウンする必要がある場合もあるだろうし、「出来ません」と言って周りの人に助けを求める方がいい時もあるかもしれない。いずれにせよ、どんな状況も必ず変化する。

ただ、苦しみの真っ只中にある時は辛い。夢も希望も自信もなくなり現実から逃避したくなる。そんな時僕はいつも父の前に戻る。父の前といっても彼は20年以上前に他界してこの世にはいないのだが。

プライベートな事を書いて恐縮だが、僕の父は旧制の小学校を出て、自転車でパンの行商をしていたようだ。父の母親は彼を産んだその日に他界したらしく、彼は母親の顔さえみたことがない。彼にとっては家庭の事情で旧制中学に行けなかったことがとても悔しかったようで、いつも僕に「お前が学校に行きたいのならどんなことをしてでも行かせてやる」と言っていた。

彼はパンの行商から運送会社を経営するまでになったのだが、僕が小学校の時に病気になり運送会社もつぶれ、入退院を繰り返しながら、やっとの思いで僕を大学まで行かせてくれた。本当に心身共にやっとの思いだったのだろう、僕が大学を卒業して就職した10日後に突然他界した。

そんな父の仏前に座ると、今自分が抱えている苦しみや悩みが、本当にちっぽけなものに感じられ、「もう一度やれるところまでやってみよう」という気持ちになる。

人間はだれしも弱いものだと思う。いつも調子のいい時ばかりではない。くじけそうになることがある。逃げだしたくなる時もある。そんな時、人間には心の支えが必要なのだと思う。

くじけそうになる時、心を癒してくれ、新たなエネルギーをもらえる場所を持っていてもらいたい。人は人によって傷つけられるが、その傷を癒してくれるのもまた人なのだ。

以上

(文字数：924 文字)

第23回

「夢のある人生」

僕は子供の頃から「一度しかない人生」ということをかなり強く意識して生きてきた。「一度しかない人生に何を成し遂げるか」これはいつも僕の心の中にあるテーマだ。

僕の中学時代はオイルショックだった。算数と理科が得意だった田舎の少年は、「これからの日本はエネルギー問題を解決しなければならない。それも環境に優しい太陽エネルギーの研究だ！」と思い、太陽エネルギー研究所が併設されていた大学へ進学した。

大学に入って、自分が研究者タイプでないことを知り、将来の目標をなくしていた頃、今度は輸出摩擦が社会問題だった。夢多き青年は、「日本で作って海外へ輸出して、海外から嫌がられるようなビジネスをしてはいけない。輸出先の国も幸せになり、輸出する日本も幸せになるプラント輸出、つまり発展途上国に製鉄所や発電所などの社会インフラを作る仕事こそ、人生をかけるべき仕事だ！」と思い込み、当時プラント輸出で業界トップだった会社に就職した。

その後、円高でプラント輸出ビジネスが低迷し、僕自身が技術部門を離れ人事部に異動するなどして、人生の夢や目的を見失いかけていた5年程前、世の中では大企業が相次いで倒産していた。「これからは組織に頼らず一人で生きてゆける人間を育ててゆかなければならない。アメリカでは元気のいいヤツは皆起業するのに、日本では皆役人かサラリーマンになってゆく。これからの日本を元気にするためにも、先ず自分自身が一人で立てて生きてみよう！」と思い、17年勤めた会社を飛び出した。

これといった技術も顧客も持っていない人間が、組織を離れて一人で生きてゆくことは考えていた以上に大変だった。自分一人で生きてゆくつもりが、組織の中にいた時以上にいろんな人にお世話になった。独立してから3年は生きてゆくのに必死だった。夢とか人生の目的など考える余裕すらなかった。

やっとなんとか食えるようになった今は、サラリーマン時代に比べるとはるかに自由である。素敵な人とだけ選んで仕事をすることも出来るようになりつつある。独立して本当に良かったと思う。

しかし、今僕は自分の夢も人生の目標も明確でない。いくら自由でも、いくらお金があっても夢や目標のない人生はつまらない。このメルマガを書き始めた昨年の秋は、夢や目標がないことに追い詰められた気持ちだったが、「今は、さまよわなければならない時期なのだ」と自分に言い聞かせて焦らないようにしている。

自分のやりたいことなどすぐには見つからないと何度も書いてきた。その通りだと思っている。目の前の仕事の苦しさから逃げ出しても、他の会社に青い鳥がいるわけではない。目の前の仕事に積極的に取り組みながら、是非あなた自身の夢や目標を見つけてもらいたい。

以上

(文字数：1123文字)

第24回

「自分らしく生きるために成果を出す」

あなたは仕事に人生を捧げたいですか？僕はどのような遊びや娯楽よりも仕事が一番ワクワクする。学生時代も早く社会に出たくてしょうがなかった。仕事を通して何かを実現したいと思っている。

僕は僕の親父やおじさん世代の、全てを犠牲にして仕事に打ち込んできた人達をととても尊敬しているし感謝している。そんな彼らの献身的な仕事があったからこそ、今の日本の経済的な発展があるのだと思うし、そのおかげで僕らは幸せな生活を送らせてもらっている。しかし、そのような仕事一本やりの生活スタイルが、家庭や子供の問題など、多くの社会問題を引き起こした一因にもなっているのではないかと思う。

僕は仕事だけの人生は寂しいと思っている。僕には仕事以外にも、家族・遊び・勉強・友達・地域社会など大切なものが一杯ある。叶うものなら、仕事・家庭・友達・地域社会など、僕にとって大切なもののバランスを取りながら生きてゆきたいと思う。

僕は会社を辞めて独立してから積極的に地域社会と係りを持つようにしてきた。地域の自治会も立ち上げたし、今はPTAの会長もさせて頂いている。地域と係りを持つと、今まで自分がいかに自分の知らない所で多くの皆さんにお世話になっていたかが分かる。仕事以外の人脈も広がってくる。そんなことが僕の幸せ感を高めてくれる。

だが、ここで誤解してもらいたくないのは、仕事以外の場で充実感を得ようと思えば、仕事を減らすのではなく、先ずは今以上に仕事で成果を上げなければならないということだ。仕事から逃げて、個人の生活を充実させてみても、それは結局人生全体の幸せには繋がりにくいのではないかと思う。なぜなら、僕達が一番たくさん時間を費やしているのはやはり仕事なのだから。

仕事の成果を上げるために僕自身がいつも気にかけているのは、自分の時間を何に使うかということだ。時間を効率的に使う上で大切なのは常に物事の優先順位をつけることだろう。また、いつもフルスロットルというより、仕事のメリハリをつける方が結果的には仕事はかどる場合も多い。

そんな中で僕が一番大切にしているのは、我を忘れて仕事にのめりこむ状況を作り出すことである。心理学用語では「フロー状態」とも言う。何かに没入している状態のことだ。人は「フロー状態」の時、最も効率よく成果を上げる。

あなたは何もかも忘れて仕事に没頭している瞬間がありますか。

以上

(文字数：981文字)

第25回

「人の期待に応える生き方」

「自分のやりたいことが分からない」と思っている若者が多いのではなかろうか。「やりたい事は何か」と聞かれるとスポーツや音楽や旅行など趣味や遊びに近いものが浮かんでくるのが普通だろう。しかし、仕事をする上で「やりたい事」と言われると、その分野で食ってゆけるかどうか大きなポイントになる。スポーツや音楽の分野で食ってゆくためには相当の実力が必要だ。僕はやりたいことが見つかってない人には、やりたいこと探しより、今仕事上で自分と関わりのある人の期待に応える生き方を勧める。

人の期待に応えられると自分自身が幸せになる。喜ばれるし感謝される。また、期待に応えようとすれば経験を積み知識を増やし能力を高めてゆかなければならない。いつも人の期待に応えられるわけではなく失敗することもあるが、そのようなプロセスの中で人は磨かれる。

そして一番大切なことは、期待に応え続けてゆこうとする人の周りには素晴らしい人間関係が作られてゆくということだ。これこそが幸せになる道であろうし、そのような人間関係の中からやりたい事が見つかってゆくのだと思う。

マズローの5段階欲求説というものがある。人の欲求は生存の欲求から始まり次第に高度化し最後は自己実現の欲求に至るというものだ。しかし、私はそんな自己実現などという自分だけの欲求を求めているはどこまでいっても幸せになれないと思う。自己実現の先にある、「だれかの役に立つ」とか「誰かを幸せにする」とかの欲求に至らなければ心の安寧は得られないと思うのである。

僧侶であり作家でもある玄侑宗久氏は、目標や希望の実現に向けて頑張ってもそれが完成することはないしピークは永遠に先延ばしされる。それより、自分の周囲に一人でも自分を必要としている人がいれば、その人に徹底的に応じるという生き方が大切だと言っている。

売れっ子作家の齋藤孝氏も、「仕事というものは、自分に向いているものは何か、自分がやりたいことは何かなどを問い詰めるより、人に頼まれたり期待されて、それに全力で応えるのが健全なスタイルだ」と気づいた時に大きな転機が訪れたと言っている。

シュバイツァー博士も言っている。「真に幸せになれる人というのは、人に奉仕することを追及し、どうやって人に奉仕するかを見つけた人だ」と。

自分のやりたいことは、それを探すのをやめた時に見つかるものなのかもしれない。井上陽水も何かそんなこと言ってたな～。

以上

(文字数：998文字)

第26回

「働こうとしない若者」

先日の朝日新聞に、若者が求職活動をしない理由として次のような項目があがっていた。

1. 会社生活をうまくやっていく自信がない(33.6%)
2. 健康上の理由(29.3%)
3. ほかにやりたいことがある(28.3%)
4. 能力・適性にあった仕事が見つからない(25.4%)
5. 自分の能力・適性が見つからない(22.6%)

健康上の理由やほかにやりたいことがある場合は別として、上記のような理由で求職活動をしない若者が多いと言われると、今の若者が可愛そうだと思うし、我々大人の教育や就職指導のあり方に問題があるのではないかと感じてしまう。

「会社生活をうまくやってゆく自信がない」というのは、社会人との人間関係に対する不安なのだろうか、それとも仕事がうまく出来ないかもしれないという不安なのだろうか。

もし、前者であれば、それは子供に勉強ばかりさせて人間関係の大切さを教育してこなかったり、世代を超えた地域での交わりをさせてこなかったりした今の社会のあり方に問題の一端があるのだと思う。

後者であれば本当は何も心配することないのだ。私はいつも新人に、「新人は仕事が出来なくてあたりまえだ。最初からうまく出来るかどうかを考えるから不安になるのだ。新人が自分に問わなければならないのは、うまく出来るかどうかではなく一生懸命取り組んでいるかどうかだけだ。難しい仕事なんて殆どない。一生懸命取り組んでいれば必ずいつか出来るようになる。一生懸命取り組むかどうかは、そうしようと思えばだれでもできる。そう考えると、何も不安に思うことはないのだ。」と言っている。

最も問題なのは、自分の能力や適性が見つからなかったり、自分の能力や適性にあった仕事が見つからなかったりして求職活動をしないということだ。これは就職アドバイスのあり方に問題があるのではないだろうか。

僕は就職サポートに関連する企業がこぞって「自己分析をして、やりたいことを見つけなさい」と言うことに大きな疑問を持っている。「大人だって自分のやりたいことが分かっている人間がどれくらいいるだろうか？ましてや、仕事をしたこともない若者に仕事をする前からやりたいことなど分かるはずがない。」これが僕の基本的な考え方だ。

「やりたい事などなくていい。自分の力で生きていけるようになるためにまずはどんな仕事でもいいから仕事をしてみなさい。」と言ってあげたらダメなのだろうか。

以上

(文字数：988文字)

第27回

「自分の仕事を見つける」

近所の年配のご夫妻とお付き合いをさせて頂いている。彼らと話しをするといつも楽しいし救われる気がする。先日も「國貞さん、自分のどこに才能があって、何に向いているかなんて70歳を過ぎても分からないものよ」と言われ心が楽になった。

人には色んな才能がある。現代は厳しい競争社会だから勝ち抜く人がもてはやされたりするが、一昔前の農業社会ではもっと違ったタイプの人が尊重されていたのだろうと思う。昔の農村ではだれかと競争するより皆で協力することの方がはるかに大事だったのだから。

今の時代は仕事をする上で多様な個性が許されなくなったようにも思えるが、考えようによれば恵まれた時代だとも言える。いろんな種類の仕事があり、自分の個性や能力に合わせて仕事を選ぶことができる。もし一昔前に農家で生まれていれば、否応なく農業をやるしかなかった。今我々は仕事を選ぶことができるようになって仕事に対して自由になった。しかし、自由になってみればどうやって仕事を選べばいいのか分からないという悩みが出てきた。考えてみれば仕事選びは贅沢な悩みだ。

昔ある劇団の座長さんが「いつまでもヒーローやヒロインを目指し続ける俳優は成功しない。端役であっても自分の役割を見つけた俳優は主役よりも存在感のある演技をする。」と言っておられたことが忘れられない。

尊敬するラーメンチェーン店の社長さんに、「どうしてラーメンをやることにしたんですか？」とたずねたら、「高校を卒業して2年ほどサラリーマンをしてから独立したくなった。乾物屋をやろうと思い、まずは会社を辞め乾物屋の勉強をするために住み込みで働ける所をボストンバックを抱えて探し歩いた。どこにも相手にしてもらえず所持金もなくなりかけた時、目の前にラーメン屋の住み込みアルバイトのちらしが貼ってあった。そこに飛び込んだことがきっかけでラーメン屋になった。」とおっしゃっていた。

自分の仕事を見つけるきっかけはそんなものだと思う。自分の能力や適性がどこにあるのかも分からない。いつ自分の仕事に巡り合えるのかも分からない。大人でもそんな悩みを抱えながら生きている人が多いと思う。だから、若い人が仕事に対して悩みを抱えていても何の不思議もないのだ。

ただ、大切なことは、悩みの前で立ち尽くすのではなく、行動しなければ何も開けてこないということ、ただそれだけだと思う。

以上

(文字数：978文字)

第28回

「幸せはどこにある」

学歴のなかった僕の両親は、僕が安定した生活を送れるようにと大学へ行かせてくれた。そのお陰で希望する会社にも入れたし今生きていけているのだと思う。

しかし、僕にとっての幸せは安定した生活や会社での出世にはなかった。確かに偉くなりたい、同期のやつらには負けたくないと思って必死で働いた時期もあった。でも、自分の心の中を冷静に覗いてみると、安定や出世の中に僕にとっての幸せはなかった。

今、本当に幸せだなと感じるのは、倒産の危機に直面しながら必死に再建の道を探っている顧問先の幹部社員の皆さんと議論している時だ。従業員とその家族の人生がかかっているから皆真剣だ。

ボーナスも出なくなり給料もかなり減額されているので、オンボロの車に乗っている。しかし、そこには人間の本当の素晴らしさがある。まさしく寝食を忘れて一生懸命に何かに打ち込む人間の姿がある。簡単に結果が出ないから僕も苦しい。自分の力のなさに嫌気がさしてくることもたびたびだ。僕のビジネスとしても儲かっていない。でも、僕にとってはそのような一生懸命な人達と一緒に仕事ができていることに何よりも幸せを感じるのだ。

今までの人生を振り返ってみて思い出深かったのは、ビルマの製鉄所建設で、完成した工場から真っ赤な鉄の製品が始めて出てきた時だった。何百人もの技術屋がただその時のために多くを犠牲にして仕事をしてきた。その何年かのことを考えると感極まるのだ。この最初の真っ赤な鉄が出てくる時を「赤通し」というのだが、「赤通し」の時はそのプロジェクトに携わった殆どの男達はその赤い鉄を見ながら涙する。

真剣に何かをするということは大変だ。しかし、真剣に何かをすることの中に素晴らしさと感動があり、そこに幸せがあるのだと思う。

こんな考えは今の若い人達にとっては「ウザイ」話なのかもしれないが、僕自身はこれからも感動を味わえる仕事を目指してゆこうと思う。

以上

(文字数：789 文字)

第29回

「お金を稼ぐということ」

我々にとってお金を稼ぐとはどういうことなのか。豊かな時代になり、お金を稼ぐこと自体の価値や重要性が軽んじられているように思う。「物質的に豊かになっても幸せになれるとは言えない。」「お金より大切なものがある。」確かにそうだ。しかし、だからといってお金を稼ぐことを恥ずかしいことだと思ったり軽んじたりすべきではないと思う。

人類が狩猟をして生きていた頃、お金を稼ぐことは獲物を獲ることだった。我々が生きてゆくために必要なことだ。お金を稼ぐことは恥ずかしいことでも罪深いことでもない。動物としてやらなければならないことなのだ。

現代はだれかに商品やサービスを提供してお金を稼ぐ時代である。現代のビジネスの仕組みの中ではお客様に喜んでもらえなければお金は稼げない。ということは、よりたくさんの人を幸せにすることができる人がより多くのお金を稼いでいるとも言えるのだ。

僕の会社は設立して4年目だ。売上は順調に伸びているが、売上が何十倍にもなっているわけではない。自分の家族を養うだけの売上しかない。会社によっては設立後4年で何十億円といった売上を上げる会社だってある。そういう意味では僕の会社は多くの人を幸せにできるほどの商品やサービスを持っていないということなのだ。

僕の妹は学校の教員をしている。ある時、妹に「勉強なんかより大切なことがある。勉強ばかりさせているから社会に出て使いものにならない人間が増えるのだ。」というような話しをしたことがある。妹は「それはそうかもしれない。でも、そうやって勉強に無頓着な親に育てられている子が、結局は勉強が出来なくなり、学校が面白くなり、問題児になってゆくよ。」と言われた。

勉強より大切なことはたくさんある。社会に出てからの生きる力は子供時代の遊びや友達付き合いの中で培われるものが殆どだ。しかし、妹の言う事にも一理ある。

ビジネスの世界でも金儲けより大切なことはたくさんある。しかし、ビジネスの世界で生きる者が、金儲けに恥ずかしさや罪の意識を感じてはいけないと思う。誤解を恐れずに言うが、ビジネスの世界で金儲けが出来ない者は、結局だれも幸せにすることはできない。

「私は金儲けをしています。」とお客様に向かって言う方がいい。仕事の厳しさが実感でき、自分が何をしなければならないが分かるだろう。

以上

(文字数：964文字)

第30回

「素敵な人」

メルマガで自分の想いを伝えようとするれば、自分自身が体験し、その体験の中から自らが学び考えたことを伝えるべきだと思いそうしてきた。ただ、今回は先代貴乃花の逝去を知り、どうしても彼について書きたくなった。

今の若い世代は先代貴乃花の相撲を見たことがないかもしれない。貴乃花の相撲は我々に感動を与えてくれた。決して体格的に恵まれていたわけではない小兵の力士だ。その小さな体で大きな力士に立ち向かい最後まで「あきらめない」姿に何度も感動した。土に着くのを遅らせるために、投げられても手をつかず顔から落ちるような力士だった。

貴乃花は大関のまま終わった。優勝も2回だけだった。しかし、歴代の横綱や何度も優勝した力士より人気があり、相撲取りとしてまた人間として多くの日本人から慕われていた。

その貴乃花が引退し親方になる時言った言葉は、「相撲を通して自分が学んだ『頑張ること』や『我慢すること』の大切さを後進に伝えてゆきたい」というものだった。

今の時代は「金持ちになる」「貧乏になる」といった勝ち負けだけに拘る人が多い。頑張ることはダサイことで、仕事はセンスよくやるのがカッコいいと思われている。苦しいことがあれば、すぐに周りの人や環境のせいにして、我慢することなくその場から逃げ出す人も多い。

優勝回数や地位を他人と比べて一喜一憂する人より、自分の信じた価値観に従って生きる人の方が素敵だと思う。

僕は44歳にしてまた新しい仕事を始めることにした。今の仕事をしている方が精神的にも経済的にも楽だ。しかし、自分が大切にしている価値観である「貢献」「変革」「挑戦」を大切に生きていこうとすれば、より大変な道を選ばずにはおれなかった。この選択が僕の人生にとって吉と出るか凶と出るかは分からない。しかし、少しでも貴乃花のような素敵な人に近づきたいと思う。

以上

(文字数：762文字)

第31回

「外国人との仕事」

僕は中学以来英語が一番苦手だった。なのに、英語で仕事をする人生を選んだ。何をするにも得意分野で勝負しなければ勝ち目はないというのが世の常識だから、人生の選択としては大きな誤りだったのかもしれない。でも、学生の頃は世界で仕事することに強く憧れていたのだから英語の世界を選ぶしかなかった。

今までたくさんの国の人達と仕事をしてきた。やはり世界を相手に仕事をしようと思えば最低限の英語力は必要だ。しかし、英語で仕事をしている人の会話内容を聞くとその多くは中学レベルの英単語と文法しか使っていない。確かに自分が担当する分野の専門用語は覚えなくてはならないが、それはそう難しいことではない。そういう意味ではビジネスに必要な語学力をいうのはそう高度である必要はない。

海外で仕事をする上で大切なのは語学力より人間性だと思う。国が違っててもビジネスは信頼関係で成り立っている。つまり人の心がかめめるかどうか重要なのだ。日本で友達がたくさんいる人は海外でも友達を作るのがうまい。日本で人気のある人は海外でも人気がある。日本で孤立している人は海外でも孤立する。人種が違っててもビジネスは詰まるところ人と人の関係であり、喜怒哀楽が分かるかどうかというような人間的な面がとても大切なのだ。

人は物を言わずともその人がどのような人間なのかは直感的に分かるものだ。人に対する配慮や優しさがあるか。厳しい状況でも逃げずに仕事をしてくれる人なのかどうか。そんなことが目、顔、そして日々の些細な行動に表れるのだ。

将来は世界を股に掛けて仕事をしたいと思っている諸君。語学力を高めておくことと同時に、先ずは日本で多くの人に信頼され慕われる人になることを目指してもらいたい。そうでなければどこの国に行っても仕事など出来ない。「私は発想が日本的でないから日本には合わない」なんていうのは大嘘だ。外国かぶれしている人より、日本のことに関心を持ち、日本を愛し、日本人に慕われている人のほうが外国人からも尊敬されるのだ。

以上

(文字数：834文字)

第32回

「挑戦し続ける」

このメルマガを書かせて頂くようになってから8ヶ月が過ぎた。アツという間に最後のメルマガとなった。今迄いろんなことを書いてきたが、その中でも一番大切だと思うことを述べて最後にしたい。

私は今から5年前、有名企業がバタバタと倒産してゆくを見て、これからは組織に頼らず生きてゆける人間を育成しなければならないと思った。そのためには先ず私自身がそうなるべきだと考え、17年間のサラリーマン生活に終止符を打った。私にはこれといった強みがなかったので、だれもやっていない事でこれからの日本に貢献できることをビジネスにしようと思い「延命治療と臓器提供に関する生前意思表示支援ビジネス」を立ち上げようとして駆けずり回った。しかし、半年であえなく失敗した。

最初の起業には失敗したものの、起業のために動き回っている時に何人かの社長さんから「私の右腕として仕事を手伝ってもらいたい」と言われ、「社長の右腕業」をコンセプトに経営コンサルタント会社を始めた。しかし、社長の右腕とは「社員になってほしい」ということであり、会社として仕事を受注することはできなかった。そして蓄えも尽き家のローンも払えないところまで追い詰められた時、本当に一人で生きてゆくことへの覚悟ができたのだろうか、少しずつ仕事が頂けるようになった。

この頃の失敗の連続が今の私にとって大きな財産になっている。人の情けが身に沁みだし、人と心を通わせることの大切さを知った。また、仕事はスキルやテクニックではなく仕事に対する覚悟が一番重要だということも体で覚えた。今仕事が広がっているのは正にあの頃の失敗があったからだ。

私は仕事をする上で大切なことは「優しさ」と「たくましさ」だと思う。「優しさ」は自分のプライドが打ち砕かれみじめな思いをしなければ身につかない。「たくましさ」は大変な状況の中に身を置き辛抱しなければ磨かれない。つまり、仕事の能力は失敗しなければ磨かれないのだ。そして、失敗だけが貴重な財産になってゆく。皆さんは何も怖がることはない。たくさん失敗すればいいのだ。

たくさん失敗しているということはたくさん挑戦しているということに他ならない。仕事が上手くできるかどうかを思い悩むより、自分が挑戦しているかどうかを自分に問ってみてほしい。優秀なビジネスパーソンは皆挑戦している。挑戦こそが皆さんを磨くための一番の方法だ。

皆さんがこれから仕事を通して成長し、優しくてたくましいビジネスパーソンになることを心から願って筆をおきたいと思う。

以上

(文字数：1040文字)